アメリカのヴィクトリアニズムと中産階級

常松　洋

はじめに

本稿の主題は、一九世紀のアメリカ（合衆国）における中産階級の男女関係・結婚・家族とそれを支えた理念、ヴィクトリアニズムの実態と変容である。偽善や二重規範（とりわけ女性への厳しい制限）といった消極的側面が言及されることの多いこの観念形態は、しかし、多様な価値を内包していた。コッベンは自制的であること、時間厳守、規律正しさ、勤勉・禁欲・誠実、所有権の尊重、家族と家庭の重視、敬虔と篤信、名誉心、体面尊重（リスペクタビリティ）などの「美徳」を列挙している。白人のプロテスタントに限定された価値体系だったから、状況によっては否定的なものに変質する可能性もあったけれど（[8], p.4）。

ヴィクトリアニズムは、二〇世紀への転換期に大きな危機を迎え、一九二〇年代の「マナーとモラルの革命」がその弔鐘になったと考えられている。確かに、一九世紀末以降の一世代は、離婚率の上昇、出生率の低下、社会進出を果たし、伝統的役割分担を拒否する「新しい女性」の登場、より親密な男女交際の定着など、以後のアメリカを特徴づける現象の出現を目撃した。しかも、女性参政権の実現が離婚率の上昇をもたらしたとの主張（[14], p.35）が示唆するように、これらの現象は、当時、相互に関連しあうものと見なされていた。この同時代の直感は、どの程度まで、正当性を主張できるのだろうか。

第一章　ヴィクトリアニズムの受容

一九世紀への転換期は、一世紀後のそれと同じく、あるいはそれ以上に根本的な変化の時期だった。独立革命に続く国家体制の整備後の急速な経済的・空間的発展、つまり、ルイジアナ購入による広大な「西部」の獲得とインディアン迫害を必然的に伴っての開拓、それを円滑に推進するための内陸開発――当初は五大湖周辺を中心とした運河開鑿と水利開発、後には鉄道建設――、一八一二年の戦争を契機に東部で進展した工業化などだけではない。ヨーロッパ諸国と同じように、広く「近代化」と表現される過程によって、民主的要因を胚胎する新しい人間観・世界観が出現し始めてもいた。

このような状況下、東部の諸都市に形成されつつあった中産階級を中心に、家族の形態や概念も変化する。子供・病人・老齢者の世話に責任をもつ、宗教・経済活動の基本的単位という植民地時代の機能が相対的に低下した。夫婦とその子供で構成される核家族は、独立・自恃・野心など新しい世界観に合致する価値を育むと同時に、競争を特

徴とする外の世界と対照的な美徳の場になった。結婚観も変化する。財産上の考慮を優先させる二家族間の経済的取引から、当事者二人の愛情を重視するものになった。個人の幸福が結婚の第一の目標になってゆく（[18], pp.160, 229; [20], pp.43-47）。

結婚の前提となる求愛行動も変化した。デミリオとフリードマンの『秘め事』によれば、一八二〇年代頃まで、それは公然と行われていた。若い男女は、性別境界線がまだ画然と引かれていない世界でともに働き、教会に出かけ、社交活動に参加する過程で自然に愛情を育んだ。婚前交渉も一般的で、一八世紀末には、新婦の三〇パーセントが妊娠した状態で式に臨んでいたという。しかし、都市中産階級が階級として出現するのと時を同じくして、少なくとも彼らの間では、公然たる求愛行動が廃れ始める。男女の愛情表現は私的なものになり、女性の家庭がその舞台となった（[11], pp.73-75）。

共和主義の影響下、伝統的な家父長主義や諸制度が力を失ったから、構成員間の関係が民主的で「個人主義的な」家族理念が定着してゆく（[6], p.27; [20], pp.43-47）。しかし、それは家族の絆を弱体化させるより、強化する方向に働いた。人口動態的にも経済的にも流動性が高く、行政機構が未整備だった社会では、家族が個人の生存にも秩序維持にも不可欠だった（[6], p.4; [7], p.43; [23], p.15）。一九世紀末にもなお強い女権反対論は、女性は「世帯の投票によって代表されている」と主張した（[14], p.35）が、女性の政治参加を離婚の増加と直結させる立場と平仄を合わせていたし、なにより家族の一体性を強調してもいた。

家父長の権威が失われた今、それはいかにして実現されうるのか。新興で「捉えどころのない」存在（[4], chap.1）であるがゆえに、自分の社会的地位や自己定義に不安を感じていた中産階級は、家族的一体をどのようにして確立しえたのか。拠りどころとなったのは、「ブルジョア的内面（イン・ティ・ア）生活（ライフ）」である。プライバシー、人間の尊厳、感受性の強い良心、両親の子供への責任感を骨子とするこの心性は、同時代の西欧世界にも広く認められるが、南北戦前期のアメリカではとりわけ重要な意味を帯びた。「社会的混乱と個人の自由に対する防壁」となったからである（[7], pp.34-43; [3], p.57）。

しかし、その家族モデルは非常に脆く壊れやすく、家長の無責任で放埒な行動によって簡単に崩壊するものでもあった。それを防ぐには、内面（的価値）の外面化にしくはない。家族の結束の可視的表現である家屋と家族構成員の規律化がその役割を担う。規律化とは具体的には、男性に中産階級にふさわしい行動やマナーを身につけさせること（文化と洗練の場である居間がその舞台となった）、公的手段による中産階級的価値の実現（女性が禁酒運動に熱心だったのは、過度の飲酒が家長による無責任な行為の代表的事例だったからである）、そして生活全般を統括する倫理、ヴィクトリアニズムの採用である。

ファイリーンは、この倫理観がフランス革命への「逆上した反応」として、一七九〇年代のイギリスに出現したと考える。下層・上流両階級を安全な行動範囲に閉じ込めることで秩序維持をはかる努力に起源をもち、やがて性道徳へと重心を移すこの価値体系は、数十年後に大西洋を渡り、存在証明を模索する中産階級によって受け入れられたと（[14], p.84; [19], p.16f）。一八三〇年頃まで、革命思想の影響もあって、独身女性が政治・経済・社会の領域で自立と自由を享受し

ていた（[18], p.159f; [20], p.55f; [24], p.190）ことからも、この説明法には説得力がある。後述するように、一世代とたたないうちに、独身女性は、非（反）ヴィクトリアニズム的で「危険な階級」と見なされるようになったのだから。

新たな役割を帯び始めた中産階級の家庭の内実は、どのようなものだったのか。端的に表現すれば、資本主義経済の発展によって生産的機能を奪われて消費を専らにする施設になり、「家族革命」と表現される変貌を遂げてゆく。その過程には、いくつかの要因が複雑かつ有機的に絡みあっていた。まず第一に――以下にみる経過は、断るまでもなく、同時並行的に進展したものである――性別役割分担が生じた。男は扶養者（プロヴァイダー）として家の外で働き、女性は妻・主婦・母親として家庭を守るべきものとされる。それはまた、生産と消費という任務分担をも意味していた（[4], chap.5; [8], p.3; [9], pp.60-66）。

このことと密接に関連して、第二に、家庭への期待やその意味が変化する。家庭は、熾烈な競争が展開する外の世界とは対蹠的な、男が新たな戦いに備えて休息する城館と見なされるようになった。静謐で美徳が支配する洗練の場、なにより個人の私生活（プライバシー）が保証される施設でなければならない。外では冷静な、時には敵に容赦ない戦士である男も、家庭に帰れば妻や子供に優しい夫・父親でなければならない（[14], p.70; [18], p.122f）。家の外と内がこうして劃然と分けられた結果、男性は緊張を強いられた。外の原理を家庭に持ち込むことは許されないが、内の道徳を競争世界に持ち出せば、敗残者になることは目に見えている（[8], pp.9, 22f）。男性は深刻な矛盾に直面した。

この内と外（ニュアンスは異なるが、以下「公私」という表現も用いる）の領域の区分は、女性にはどう影響したのだろうか。家庭に閉じ込められ、外への進出を禁じられた女性は、男性が直面したような公私の二面性に悩むことはなかった（[18], p.126）。しかし、安らぎや洗練といった側面が強調され、神聖視されるようになった家庭の保持を一任されたから、女性には大きな負担がかかる。それが安らぎと洗練の場であるためには、妻・母親としての任務を果たし、夫には愛情深く忍耐強く、子供たちには慈愛に満ちた厳しさで接し、家事をきちんとこなさなければならない。時代が下ると、義務の不履行は離婚に直結した（[19], pp.39-41）。

家庭が神聖である以上、女性も神聖でなければならない。ヴィクトリアニズムはそのような社会的要請にも応えた。性的貪欲、気紛れ、知的劣等など否定的要因からなっていた従来の女性観が、ここに覆される。純潔や貞淑、敬虔や道徳的優越や自己犠牲を女性の属性と決めつける新しい理念、二重規範に裏打された「真の女性崇拝」が出現したのである（[4], p.184; [11], p.70; [18], p.122f; [20], p.55; [24], p.162）。女性は性的欲望とは無縁で、生殖のためにだけ性行為に応じる受動的存在ともされた。実際には、女性が愛情の性的側面を期待・享受していたことは、ゲイやリストラが実証的に論じているところであるが（[24]; [18], chap.3）。

家族革命の第三の局面は子供数の減少である。一九世紀の百年間で、それは七人強から約三・五人へと半減した（[11], pp.58, 174; [14], p.41）。子供に労働力や家計の補助を期待する農家や下層階級の家族では、世紀転換期になってもなお出生率が高いままだった（移民女性の出産数は、アメリカ生まれの白人女性のほぼ倍だった）から、

都市中産階級の間ではもっと低下していたはずである（[3], p.14）。医療技術・栄養状態・衛生施設の向上や改善によって幼児死亡率が低下し、多い子供が経済的負担になったから、これは当然の帰結だったと言えるが、以下のような明確な家族戦略に基づいてもいた。

(1)家族の規模を制限し、より少ない子供の養育・教育に費用と愛情を傾注する、(2)中産階級としての地位の達成と体面保持に必要な価値を子供に教え込む、(3)子供たちは、より長く親の世帯に留まり、両親の監視と経済的支援の期間を長期化させ、(4)拡張しつつある頭脳労働の世界での就職に不可欠な手段、より高度の教育を受ける、(5)中産階級の「揺り籠」から巣立った若者は、自らの地位を確立できるまで結婚を遅らせる、それは小家族の再生産を促すから、一連の家族戦略が以後の世代においても繰り返されることになる（[4], p.187; [23], pp.161, 184f）。社会的経済的な地位の達成と確保には、晩婚・少産を骨子とする家族戦略が不可欠だった。

消費も家族戦略の一環となる。「社会的体面を表現し、職工の粗野な世界〔下層階級〕と流行の人工的な世界〔上流階級〕とから、自らの家族を峻別できる振舞の獲得を容易にする」環境の形成が、消費の機能や目的だったからである。とりわけ、カーペット・ソファ・ピアノなどの家具が設えられた居間こそ、彼らが社会的地位への要求を実現するための舞台であり、その努力の可視的表現だった。一八五七年の『ハーパーズ』誌で、長靴を履いた脚を机に乗せ、室内でも帽子を脱がず、食物をナイフで口に運び、外国製の絨毯にさえタバコの噛み汁を吐き出すと非難された男性が、妻によって「文明化」されるには、このような環境が必要だった（[4], p.183）。

しかしこの戦略には問題点もあった。一八六九年の『ハーパーズ』が懸念したように、消費を掌る女性が「娯楽と流行にあまりにも没頭」しているため、子供が「ある程度までなしで済まされるべき支出」と考えられるようになったこと（[3], p.15）。「なぜ若者が結婚を延期するのか」（*LHJ* (*Ladies Home Journal*) 9-10 (Sept. 1892), p.4）といえば、自分の収入では、女性に「彼女の父親の家庭の快適さ」を保証できないと考え、求婚を躊躇する若者が増加したこと。家庭が洗練や上品さを強調するあまり「女性化」してしまい、少なくとも一部の男性から敬遠されるようになったことである。中産階級の家庭には、その解体要因が組み込まれていた可能性がある。

第二章　ヴィクトリアニズムの動揺

一九世紀半ばには、家庭と家族が中産階級の生活の中心になり、外の世界との対比において神聖視されるようになった。それは、プライバシーが、中産階級の価値体系において決定的な意味をもつようになったこと、家族間・夫婦間の親密な関係を保証する一方で、彼らの親密さに支えられていたことを意味している。同義反復的言い回しをするなら、プライバシーが大事なのは家族が大事だからであり、愛情が重要なのはそれが唯一の家族形成原理だからであり、プライバシーは愛情と結婚との前提をなしていたということになる。いずれかが破綻を来せば、このシステム全体が崩壊しよう。そして世紀末には、家庭・家族が危機的状況を呈していた。

一八六七年から一九二九年までの約六〇年間で人口は四倍に、結婚件数は五倍になったが、離婚件数は二一倍と飛躍的に増加し、一九二

〇年代末には、結婚六組につき一組が離婚で終わっていた（[14], p.40; [19], p.2）。諸州は、アメリカの離婚率が世界最高であることが判明した一八八九年以降、離婚を阻止すべくその手続きを厳しくした。離婚の法律上の根拠は四百以上から二〇以下に減らされ、ニュージャージーは不倫と遺棄、ニューヨークは不倫のみを離婚理由として残し、サウスカロライナは離婚を全面禁止にした。離婚と再婚の間の待機期間や、離婚申し立ての条件である州居住期間も延長された（[19], p.4f; [20], p.109）。これら規制の「効果」のほどは、上述の数字が示す通りである。

他方、チュダコフによれば、一九世紀最後の三半世紀から一九二〇年代まで、諸都市を中心に独身という「流行病」（[6], p.73）が猖獗を極めた。一八九〇年には、一五歳以上の全男性の約四割が独身で、人口十万人あたりの結婚数は、一八七〇年の九八組から九一組へと減少していた。これは、同時期のヨーロッパ諸国と比べるとかなり大きいとはいえ、近年のそれを除けばアメリカ史上最低の数字である。この現象について、チュダコフは、男女間の数的不均衡や経済的側面からの説明をいずれも却下し、商業娯楽の発展が新しい男女関係を成立させたとする文化的理論を、さしあたりの結論としている（[6], pp.47-71; [15], p.238f）。

この論点については後に検討するが、一つの問題が生じる。一八九〇年以降、とりわけ女性の間に、結婚への期待が（それゆえ、幻滅と離婚率も）高まったとする見解もあるからである。さらに厄介なことに、結婚願望の高揚の理由が、愛情と平等を原理とする民主的夫婦関係の出現に求められている（[13], pp.78-83; [19], pp.7, 60-62; [25], p.115f）。夫婦関係の民主化は一八三〇年代頃には実現していた（[3], pp.79-118）はずだというのに。しかし、この問題はひとまず棚上げにしておく。離婚率の上昇とは両立する結婚への期待の増大は、独身者の比率の高さとはどのように同居していたのだろうか。

一八九〇年以降、独身者の比率は逓減し結婚率は漸増しているから、結婚への（変質した）期待の増大がまず確認できる（後述）。また独身者についてみれば、出生率と同じく、都市中産階級の比率が突出して全体の数字に影響を与えている。一八九〇年、三〇歳から三四歳でなお独身の男性の比率は、ボストンで三八パーセント、ニューヨークで三三パーセント、サンフランシスコでは五六パーセントに達していた（[6], p.50）。結婚率上昇が、男女間の年齢の接近という変化を伴った可能性はある（[24], p.114f）が、世紀転換期が独身者の時代でもあり、離婚の増大とともに、伝統的制度としての結婚と家族の変容を反映していたことを確認しておけば十分である。

結婚は、自由恋愛論者が言うように、「不快な便法」「惨めな失敗」「野蛮な遺物」「男女双方にとっての奴隷制的な鎖」（[22], p.241f）になりつつあったのか。伝統的な立場は反論を試みる。「結婚が家族の基本であり、家族は、市民社会の有機的単位にして社会秩序の大錨である」から、離婚という問題の考察に際しては、社会の利益が第一に、個人の利益は二義的に考慮されねばならない。離婚手続きの簡略化は「国家の権利を完全に無視するものである」。一八八四年の論文で、「結婚と離婚」を考察したニューヨーク州最高裁判事ノア・デイヴィスの発言（[3], p.84）は、制度としての結婚・家族擁護論の代表的事例と考えてよかろう。

革新主義時代の福祉関連諸政策――老人ホームや児童養護施設の整備、女性・児童労働の制限、義務教育制度の拡充、食料・薬品の安全性の管理、公衆衛生の（思想と設備の）充実――は、離婚阻止が直接の目的だったかどうかはともかく、家族への援護、家庭の負担の軽減を目指していた（[5], pp. 58, 108–12; [20], p. 130）。施策の背景に、頑健な兵士の確保という帝国主義的見地にも立った国民の健康への配慮や、育児・家事関連商品の売り込みを画策する資本主義のもくろみがあったとしても。結果として、これらの政策は家族本来の役割、とりわけ福祉的な機能や責任をさらに奪うことになる（[15], p. 191）。

しかし、この趨勢を、公的領域による私的領域の一方的な侵食と見なすことは、正しくないだろう。たとえば、一八八〇年代以降の育児書の氾濫（[14], p. 43）は、育児の重要性に対する社会的圧力の高まりに母親が屈したためだけではない。年長世代を欠く核構造だったことにくわえ、中産階級の家族が、郊外生活で近隣との交流を失い、子供の教育を重視した結果でもある。家族の機能の収縮には内からの圧力もあった。「家族の防衛」を掲げ、政治の「家政化」を標榜することで、女性参政権運動が一九一〇年頃から急速に前進し始めた事実（[11], p. 151; [14], p. 36f）をここに重ね合わせれば、公的領域と私的領域の境界線がずれ始めていた可能性が浮かび上がる。

このずれは、家族のあり様をめぐってすでに進行していた。先に引用したデイヴィス判事は、「子供の多い家族は離婚に対する防御壁である」として、家族規模の縮小を離婚増加の原因と決めつけてもいた（[3], p. 84）。このような発言は、離婚と出生率低下が同じくらい深刻に、しかも不可分なものとして受け止められていたことを示唆している。世紀末、移民排斥主張にも煽られて、外国生まれとその子孫が支配的集団になるとの不安が出現し、「民族の自殺」として表現されたのは、そのような懸念の深甚さを雄弁に物語っていよう（[9], p. 30; [14], p. 41）。離婚と同様、出生率低下にもなんらかの対策が講じられる必要があった。

南北戦争後のアメリカは、中絶と避妊の禁止という方針で臨んだ。その先頭に立ったのが、「猥褻文芸ならびに不道徳用品の販売と流通を禁止する法」（一八七三年）の制定・施行に尽力したアンソニー・カムストックである。中絶と避妊を猥褻概念で括る発想には、本人の性的強迫観念は措くとして、それなりの背景があった。一八六〇年代以降、商業的大衆文化が従来の自粛を放棄して性的関心を商品化したこと、急速な経済発展が、国内農村部や外国から多くの独身男性を都市に引きよせたこと、通信網の発達や第二種郵便制度の制定も加わって、安っぽく扇情的な小説が市場を発見したことである（[3], pp. 35–40; [9], p. 31f; [11], pp. 158–60）。

しかし、この「猥褻」の定義は、出産や若者の教育（「悪書」の排除）など本来、家族の私的領域に属する問題の在処を曖昧なものにした。『秘め事』は、中絶問題やカムストック法を通じて、性の問題が、中産階級においては「私化（プライヴァタイズ）」されてゆく一方で、公的領域に移動し始めたと結論づけている。猥褻取締法など一連の規制の試みは、とりわけ体面を重んじる中産階級に沈黙を強制し、他方、市場経済の論理は、「猥褻な」文芸・道具や情報、娯楽施設を通じて、性的事柄（セクシュアリティ）を私的な場である家庭から引きずり出した。こうして一九世紀最後の四半世紀には、「プライバシー理念が、性の商業化と心地悪げに共存」

することになった（[11], p.166）。

もともと微妙な均衡に依拠していたこの共存は、すぐに不安定さを増してゆく。社会純潔運動が性病や売春の問題を取り上げ、性の問題を公的なものにしたからである（[15], pp.192–96, 298–306; [22]）。性に関する沈黙のベールを打破したこの運動は、性道徳革命の先駆ともなった。というのは、売春を男の性欲のはけ口として公認する二重規範が批判され、カムストックの影響力の消滅による避妊の知識と情報の普及も加わって、性行為を夫婦間に限定する動きが加速したからである（[11], p.150; [13], pp.69–80）。ここに、ロマンティックな愛情の完成としての結婚という伝統的理想が現実化する条件が整い、結婚願望が飛躍的に高まることになった。

「共存」の動揺を考察する際、さらに見落とせないのは、公的（パブリック）つまり商業的娯楽（[21], p.5）の発展とともに、性の商業化が進行したことである。この問題については、エレンバーグの見通しが示唆的である。彼によれば、娯楽・遊興施設における階級・人種・性による隔離が進むのは、一九世紀半ば以降のことだった。たとえば、一八三〇年代のニューヨークを代表するパーク劇場では、職工は平土間、上流階級と女性はボックス席、売春婦・下層階級・黒人は天井桟敷といった具合に、階層や職種によって場所は異なっていたものの、あらゆる人々が同一の劇場で同時に上演を楽しんでいた（[12], p.15f; [21], p.10f）。

その状況は世紀半ばに一変する。上流・中産階級は正統演劇、コンサート・ホールなど高踏文化の施設や私的な社交に撤退し、下層階級はバラエティ、バーレスクなどの大衆演劇、酒場、売春宿、ダンス・ホールに蝟集するようになる。売春宿・酒場など大衆娯楽の施設に出かけることは、男性には――それほど頻繁でなければ――黙認されたが、良家の子女には体面を汚す行為以外のなにものでもなくなった（[12], pp.8, 12–14; [19], pp.29, 41f; [21], p.18）。自宅や同じ階層の友人宅が、女性に公認されたほとんど唯一の気晴らしの場となる。居間は、そのような意味でも、女性が統括する女性のための空間になり、男はますます遠ざかってゆく。

まず経済生活や政治活動の面で、公私それぞれの領域を配分された中産階級の男女は、性的なものを含む娯楽の次元でも同じ経験をした。しかし、内と外の境界は、一九世紀後半が進むにつれ不分明の度合いを増してゆく。領域区分に依存する二重規範もその拘束力を喪失する。たとえば、一八七〇年代頃から出現する百貨店は、消費を掌る女性を街の中心部へと駆り出さずにはいない。遊園地、ダンス・ホール、映画館などの商業的な娯楽施設は、とりわけ若い男女にとって魅力的なものに映る。市電や後には自動車が彼らの行動の範囲を広げてもいた。このような状況下、男女交際も大きく変貌を遂げることになる。

第三章　ヴィクトリアニズムの終焉

中産階級の男女関係においてプライバシーと並んで重要だったのは、懇ろでないこと、形式的な堅苦しさである（[19], p.68）。「中産階級的体面の砦」（[2], p.16）、『LHJ』の若い読者からの質問への回答欄は、懇ろへの警告に充ちている。若い男性にキスを許すのは、きっと後悔する「懇ろな行為」、「どこに至るかわからない懇ろへの転

落道」であり、若い男性を洗礼名で呼ぶといったきっかけから始まる「懇ろは侮蔑を育む」ことになるから行うべきではないし、「若い男女の間に懇ろが許されるようなゲーム〔キスとりごっこ〕」の善悪は自分たちで判断できるはずである（7-9（Aug. 1890), pp. 10, 24; 7-10（Sept. 1890), p. 24; 7-12（Nov. 1890), p. 32; 8-1（Dec. 1890), p. 12)。

しかし、この種の質問が数多く寄せられた事実がなにより、中産階級の娘たちが男友達に写真を与え、キスを許し、洗礼名で呼びあって、懇ろな関係を築いていたことを雄弁に物語っていよう。実際、堅苦しい（ルー）男女交際の象徴ともいうべきシャペロン（ファーマ）について、依然として多くが語られてはいるが、それを「必要な制度と考える若い淑女はアメリカ全体で千人もいない」との諦念を込めた記事も、同時期の『ＬＨＪ』には掲載されている（8-12（Nov. 1891), p. 6)。「中産階級的体面の砦」は、なぜ形式にこだわったのか。未婚の男女間に「間違い」があってはならないからだし、男女交際が結婚を前提にしていたからでもある（[9], pp. 10-16)。

中産階級の男女交際は「訪問（コーリング）」という形を取った。そのお膳立てをするのは娘の母親で、具体的手続きは以下のようである。結婚可能年齢――本格的な交際開始年齢を一六歳としている研究書もあるが、一八から一九歳が適切な年齢とする文献もある（[9], p. 9; *LHJ* 8-2（Jan. 1891), p. 12; [25], p. 118）――になった女性は、一人前であることを示すべく髪を結い上げ、社交界にデビューする。何人かの若者から訪問の、つまり交際の申込みがある。母親の眼鏡にかなった者のみがそれを許される。最終的には一人に絞り込まれ、二人はあくまで一定の範囲内でより親密な交際を行い、結婚に至る（[2], p. 15f; [9], p. 11f)。

婚約が公けにされてからは、二人だけでより親密な関係を築くことも認められる（[24], pp. 81-87）が、それまでは、基本的に女性宅の居間や玄関が交際の場だった。当然、女性の家族の監視の目が光っている。リストラのように、家族が寝静まった後、朝の三時四時まで二人きりで過ごす事例も多かったと、監視の微弱ないし不在を示唆する研究者もいる（[18], p. 165）が、机上の空論ないし女性の論理と言うべきであろう。当の男性にしてみれば、強い圧力を感じずにはいられなかったはずである。娘であれその母親であれ女性の主導権のもとに、私的な場で堅苦しく営まれるというのが、ヴィクトリア期アメリカの男女交際の原則だった。

このような原則は女性にも圧力となる。家庭を神聖化する社会理念が、結婚以外の選択肢を認めなかったからである。「南北戦前期セントルイスの女性と危険な階級」によれば、「明白な自活の手段」を欠き、「あてもなく徘徊する」のを目撃された独身女性は浮浪罪で逮捕された。刑法制度の不備（女性犯罪者に適用できる罰則の欠如）、急速な経済発展による社会混乱、浮浪罪の定義の曖昧さなど特殊な事情もあったし、売春宿に属さない自営の娼婦の摘発がその主目的だったが、「都市でひとり暮らす女性は、社会の許容範囲を越えている」との通念も反映されていた（[1], pp. 737f, 745-47)。中産階級の未婚女性が、両親に全面的に依存する存在だったからである（[9], p. 18)。

世紀末になっても、親や夫と暮らしていない女性を危険視する、端的には売春婦扱いする「伝統」は存続していた。一八八九年、七人の

若い女性が、ニューヨークの貧民街にセトゥルメントを開いたとき、そこを最初に訪れたのは地回りの警察官だった。新しい売春宿が開店したと勘違いした彼は、賄賂を要求するために立ち寄ったのである([10], p.11)。セトゥルメント活動が当時、大学出の若い女性にとって、体面を保ちながら行える数少ない選択肢であり、改革の道を選んだ女性の多くが独身を貫いた([14], p.147)ことを考えあわせると、この逸話は重要な意味合いを帯びてくる。一九世紀末まで、独身女性は正当な中産階級の一員ではなかった。

男性の場合、結婚への圧力は女性ほどには強くなかったが、上にみたように、求愛中は別の圧力に晒されていた。それが場合によっては、独身の選択につながった可能性はある。実際、家庭に入ることで「女性化」することを恐れ、結婚を回避した男たちがいた([17], p.52-59)。結婚反対論の代表がドナルド・ミッチェル『独身男性の夢想』である(初版は一八五〇年だが、今世紀になっても版を重ねていたから、一九世紀後半を通じて一定の影響力があったと考えられる)。著者によれば、結婚は男を女性の「捕虜」にし、妻は「あなたの生活を引き裂く」存在である。そのような悲惨のために、なぜ独身生活の自律と自由を放棄せねばならないのか([6], p.36; [15], p.106)。

この懸念は「男らしさ」の(喪失という)危機に由来した([16], chap.7)。それがなにより、法人化によって生み出された集団、巨大な機構の歯車にならざるをえず、目的意識も明確な方向感覚も達成感もなしに、惰性的に働くホワイト・カラーに特有な現象だったことは、つとに指摘されている([17], pp.103, 118; [18], pp.49-52; [21], pp.4f, 43-45)。しかし、キメルの近著は別の解釈を提示する。その議論の前提となっているのは、優雅な貴族、英雄的な職人、成り上がり男(セルフ・メイド・マン)(「独立独行の男」が定訳だが、キメルの定義に従う)という三つの男性類型がアメリカ人の思考を支配してきたという見通しである([17], pp.9-17)。

第三の類型が、一八三〇年代以降、アメリカ人男性の具体的モデルになるが、それぞれ土地の所有、職人・商人・農民としての自営という具体的な身許保証をもち、自分の地位に関して不安をもたなかった前二者と違い、その成功は自明のものではなかった。資本主義の発展とそれが解放した無限の機会が、そのような事態をもたらした。平等の機会が成功と失敗の可能性をも平等にしたから、男たちは不安定で不安な状態におかれた。男らしさが成功で測定されるものなら、成り上がりは最初から、男らしさに不安を抱いていたことになる。不安を解消するには、自分の成功を社会的に認知してもらうしかない([17], pp.9, 23-26)。

社会的認知はどうすれば得られるのか。キメルは、労働の場で証明されるものと曖昧な表現しかしていない。より具体的な手段は外見で、男たちは髭や口髭をのばし、女性的な服装を避けた([17], pp.26, 38, 60)。ヴィクトリアニズムの要因が体面だったことを考慮すれば、瑣末なものではない([16], pp.134-37; [21], p.32)とはいえ、もっと確実な証明手段があった。外観・内実ともに充実した家である。ジャクソン期以降、肉体労働者と中産階級は、住宅において明確な相違を示し始めると指摘したのは、ブルーミンだった。街中の下宿屋や集合住宅に暮らす前者と、郊外に三階建ての自宅をもつ後者の相違は一目瞭然だった([4], pp.139, 149-55)。

その家屋が純粋に私的な空間になり、社交の場、「文明化」の舞台である居間がその中心に位置したことはすでにみた通りである。大邸宅ではないにせよ、見苦しくない住居にふさわしい家族構成が不可欠だったことも、言うまでもない。構築物・人間関係としての「家」が、中産階級の生活をあらゆる面で規制することになった。それゆえ、家・家庭・家族は女性だけでなく、男性にとっても、息苦しいものになりえた。家が彼の城館であるのなら、世紀末、男は不在領主になりつつあった（[17], p.59）。友愛結社や大衆娯楽施設が男の避難所として機能した所以であるが、詳論する余裕はない。

世紀末における「男らしさ」の危機が、このように理解できるのなら、ミッチェルの懸念は誇張ではないし、二〇世紀への転換期を挟む半世紀が「独身者の時代」になったことに不思議はない。他方、敢えて結婚し、中産階級的家族を新たに作ろうとする若者には、男女交際の主導権を奪還することが、せめてもの自己主張になった可能性がある。女性の家庭の居間ではなく、商業娯楽施設（遊園地、映画館、ダンス・ホール）に二人きりで出かけ、二人分の費用をもつことで、「扶養者」としての本来の役割を取り戻す。二〇世紀初頭、中産階級の若者に急速に普及する新しい男女交際の形態、デートの意義はここにもあった（[2], pp.4, 20-23; [21], p.27）。

しかし、この新しい風俗にしても、女性の同意がなければ不可能だったし、女性が主導権を握っていた可能性もある（[19], p.84）。エレンバーグによれば、一九一〇年代初頭、キャバレーやキャフェが午後にダンス・タイムを設定して、市当局や良識派市民を憂慮させた。未婚・既婚を問わず良家の若い女性が、街の女たちとともに、店に雇われた移民の下層階級出身のダンサーを相手に踊ったからである。彼女たちがその「タンゴ海賊（パイレート）」と性的関係をもったかどうかは、さしあたり重要ではない。「公然の（パブリック）非公式的（インフォーマル）な雰囲気」に浸り、それを積極的に楽しんだことに彼女たちの罪があった（[12], pp.76-85; [2], p.18f; [21], pp.104-07）。

一九〇七年十月の『LHJ』には示唆的な助言が掲載されている（24-10, p.60）。有料の娯楽施設に男性を誘ってよいかとの質問に、費用を負担するのは男性だから、決してやってはいけないと。ここにはデートの経済学だけでなく、女性の積極的な態度も示されている。私的で堅苦しく形式尊重的な男女関係は廃れつつあった。女性が強制されてきた受動性を拒否し始めていた。男女交際における非公然性と形式尊重は、体面や性別役割分担、広い意味での二重規範を反映するものだったが、女性には飽き足らないものになっていた。結婚の唯一正当な根拠が情熱的な愛情であるのなら、なぜもっと懇ろであってはいけないのか。

以上にみた推移は、社会進出、離婚率の上昇、参政権の前進などとともに、女性が伝統的な領域設定線を越境し始めていたことを示す。なぜ女性が「越境」の主導権を握れたのか、その背景には多様な政治的・経済的・社会的要因があった。それらを紹介し、統合的な解釈を提示する余裕はないので、大まかな見通しを示すにとどめたい。中産階級の価値観が女性に私的領域しか認めていなかったことに、その理由は見出せよう。女性は、公私の使い分け、内と外の二面性に悩まされていなかった（[18], chap.5）。それゆえ、自分に課された役割に不満を感じたとき、私的領域の自然拡張という形で、伝統的な領域区

分を乗り越えることができたのである。

おわりに

女性がヴィクトリアニズム解体の先陣を切ったという見通しは、目新しいものではなかろう。公私の領域の境界線を踏み越え、従来の線引きをずらす作業が内なる存在にとってより容易だったというのは、「常識的に」もわかり易い理屈である。彼女たちの「反逆」の社会的背景には、本論で略述したもの以外にも、育児からの相対的解放、消費者資本主義の展開による「生活水準の向上」、女性の性愛への（社会と女性自身の）眼差しの変化、健康・若さ崇拝、家政学の普及など多様で複合的な要素があった。これらの条件が出揃うのは世紀末のことだから、この時期に伝統への抵抗が表面化したのも不思議ではない。

しかし、より主体的な要因はなかったのだろうか。世紀末における女性の漠とした不安の理由を、社会的活動への意欲をかき立てた高等教育と社会進出を認めない現実との対立に見出す解釈（[10], p. 36f; [14], p. 21f）は、一つの見通しを与えてくれよう。また、男性が中産階級としての地位を達成・確保するに際して、女性が果たした役割も考慮すべきである。彼らに長期の教育を可能にしたのは、家族の女性（母親・姉妹）の犠牲的な支援だったから、女性の伝統的な役割の放棄は、男の立場を危うくし「男らしさ」の危機を招く由々しき事態だった（[16], p. 161f; [23], p. 172f）。

この二つの展望は――中産階級の若い未婚女性が自己犠牲に嫌気がさし、大学に進学して自分がおかれている立場の矛盾を認識したといった具合に――、単純に統合できるものではない。そのような時間的前後関係は認められないからである。両者の共通点を探ると、中産階級の生活にゆとりが生じた可能性が浮かび上がるが、特定の歴史事象の説明としては、有効性をほとんど主張できないだろう。さしあたり、「捉えどころのない」存在だったがゆえに、不自然で厳密な公私の領域区分を自らに課すしかなかった中産階級が、社会的・経済的安定とともに、その負担に耐え切れなくなったという見通しを提示して、稿を閉じることにしたい。

参考文献一覧

[1] Adler, Jeffrey S., "Streetwalkers, Degraded Outcasts, and Good-for-Nothing Huzzies: Women and the Dangerous Class in Antebellum St. Louis", *Journal of Social History* 25(1992), 737–755.

[2] Bailey, Beth L., *From Front Porch to Back Seat: Courtship in Twentieth-Century America* (1989).

[3] Beisel, Nicola, *Imperiled Innocence: Anthony Comstock and Family Reproduction in Victorian America* (1997).

[4] Blumin, Stuart M., *The Emergence of the Middle Class: Social Experience in the American City, 1760–1900* (1989).

[5] Chudacoff, Howard P., *How Old Are You?: Age Consciousness in American Culture* (1989).

[6] *Do, The Age of the Bachelor: Creating an American Subculture* (1999).

[7] Clark, Norman H., *Deliver Us from Evil: An Interpretation of American Prohibition* (1976).

[8] Coben, Stanley, *Rebellion against Victorianism: The Impetus for Cultural Change in 1920s America* (1991).

[9] Craven, Harvey, *The Light of the Home: An Intimate View of the Lives of Women in Victorian America* (1983).

〔10〕 Davis, Allen F., *Spearheads for Reform: The Social Settlements and the Progressive Movement 1890-1914* (1967).

〔11〕 D'Emilio, John & Estelle B. Ereedman, *Intimate Matters: A History of Sexuality in America* (1988).

〔12〕 Erenberg, Lewis A., *Steppin' Out: New York Nightlife and the Transformation of American Cultue, 1890-1930* (1981, 1984).

〔13〕 Fass, Paula S., *The Damned and the Beautiful: American Youth in the 1920s* (1977).

〔14〕 Filene, Peter G., *Him/Her/Self: Sex Roles in Modern America* (1974, 1986).

〔15〕 Gilfoyle, Timothy J., *City of Eros: New York City, Prostitution, and the Commercialization of Sex, 1790-1920* (1992).

〔16〕 Hilkey, Judy, *Character Is Capital: Success Manuals and Manhood in Gilded Age America* (1997).

〔17〕 Kimmel, Michael, *Manhood in America: A Cultural History* (1996).

〔18〕 Lystra, Karen, *Searching the Heart: Women, Men, and Romantic Love in Nineteenth Century America* (1989).

〔19〕 May, Elaine Tyler, *Great Expectations: Marriage and Divorce in Post-Victorian America* (1980).

〔20〕 Mintz, Steven & Susan Kellogg, *Domestic Revolutions: A Social History of American Family* (1988).

〔21〕 Nasaw, David, *Going out: The Rise and Fall of Public Amusements* (1993).

〔22〕 Powell, Aaron M., *The National Purity Congress, Its Papers, Addresses, Portraits* (1896, 1976).

〔23〕 Ryan, Mary P., *Cradle of the Middle Class: The Family in Oneida County, New York, 1790-1865* (1981).

〔24〕 ゲイ，ピーター，篠崎実他訳『官能教育』(みすず書房，1999年)。

〔25〕 リンド，ロバート&ヘレン，中村八朗訳『ミドゥルタウン』(青木書店，1990年)。